

# ブラジル人学校と大学を結んだ遠隔日本語教育 ～初級学習者に対するブレンディッドラーニングの試み～

安藤 淑子

Teaching Japanese connecting Brazilian school with university through e-learning:  
Blended-Learning for beginning Japanese language students

ANDO Yoshiko

## Abstract

There are a number of children enrolled in Brazilian schools that have been living in Japan for a considerable amount of time, yet cannot demonstrate sufficient proficiency in Japanese. Meanwhile, these students must have a certain level of Japanese proficiency in order to keep a wide variety of options open for the future.

At the request of a Brazilian school, we implemented a Blended-Learning program that combined classroom lessons in the Brazilian school with e-learning courses offered by the university. Three eighth-year students from the Brazilian school who had only a beginning level of Japanese proficiency participated. The e-learning was in two forms, a school study and an interactive study. The interactive learning focused on practical Japanese usage and related vocabulary to complement the grammar and sentence structure focus of classroom instruction. In addition, the interactive learning utilized small study groups divided by level of proficiency, in contrast to the combined-level group structure of the classroom.

The study made use of a toll-free IP telephone and web camera, and looked at problems and instructional methods particular to distance learning.

キーワード：eラーニング、ブラジル人学校、ブレンディッド・ラーニング、日本語教育、テレビ電話  
Key words：e-learning, Brazilian schools, Blended-Learning, teaching Japanese, videophone

## 1. はじめに

法務省入国管理局によると平成20年末現在、日本に滞在するブラジル人人口は312,582人で、外国人登録者総数の14.1%を占めている。日系ブラジル人の増加に伴って日本国内には、1995年頃よりブラジル人の子どもたちが母語で教育を受けることのできる「ブラジル人学校」が出現した。2000年にはブラジル教育省の認可を受けた教育機関を加え（小内2003）、2009年現在、全国のブラジル人学校の総数は86校、在籍する生徒は3881人を数えるまでになった（文部科学省2009年2月）。

ブラジル人学校の選択は、ブラジルでの進学（83.3%）、ポルトガル語による学習（20.5%）、ポルトガル語の学習（17.4%）が主たる理由であり、本国ブラジルとの繋がりを維持することが目的である（濱田2008）。しかし一方で、近年の不況下、多くの子どもたちが経済的な理由等でブラジル人学校を離れている。文部科学省の調査（前掲）によると、その内42.0%が「本国への帰国」、34.8%が日本国内における「自宅・不就学等」という現状である<sup>1)</sup>。経済状況の変化というような不確定要因を考慮に入れるならば、ブラジル人学校に在籍する子どもたちにとって、日本語学習<sup>2)</sup>

は将来の選択肢を広げるために重要な役割を果たすだろう (小野寺 2002)。

濱田 (前掲) によると、ブラジル人学校の充実に比例して日本語をほとんど話すことができない子どもたちの割合も増加しており<sup>3)</sup>、一方で日本での滞在が長期化傾向にある保護者の中には、学校に日本語教育や日本社会との交流を望む割合が増えているという<sup>4)</sup> (小野寺 前掲、濱田 前掲)。こうした現状を背景に、ブラジル人学校の側にも、在籍する子どもたちに対する日本語教育の必要性が次第に認識されるようになってきている (今津・児島 2001)。

## 2. ブレンディッドラーニング

ブレンディッドラーニングは、一般的に、伝統的な教室授業に e ラーニングを補完的に組み合わせた学習であると定義される (Bersin 2004)。近年、ブレンディッドラーニングは企業研修のほか、小・中・高等学校の授業や、専門学校、大学等の高等教育機関において広く実施されている (宮地他 2009)。

ブレンディッドラーニングにおいてブレンドされる e ラーニングのタイプには、(1) 同一場所における同期 (synchronous) 型の学習、(2) 異なる場所での同期型の学習、(3) 同一場所における非同期 (asynchronous) 型の学習、(4) 異なる場所での非同期型の学習がある (宮地他、前掲)。さらに、それぞれのタイプに使用されるメディアは多様であり、その選択と組み合わせは、学習対象者のニーズやカリキュラム、学習管理方法、システムの経済性、操作性のほか緊急性や学習者の規模など多様な条件に適合することが要件である (Bersin 前掲)。ブレンディッドラーニングは、教室授業との相乗効果によって、より効果的・効率的な教育の実現を目指しているのである (Garrison & Vaughan 2008)。

日本語教育におけるブレンディッドラーニングの実践報告は、中溝 (2009)、篠崎 (2010) などまだ少数であり、e ラーニングの選択によってもたらされる学習効果を検証したものは池田 (2010) などさらに少数である。また、これらの実践例は

大学における留学生教育に限定されている。

本稿では、ブラジル人学校と大学を繋いだ同期型／対面・双方向の遠隔日本語教育を、教室授業と組み合わせたブレンディッドラーニングの実践報告である。今回実施した遠隔教育は、ブラジル人学校における日本語学習のニーズに対応し、生徒のコミュニケーション能力の伸長という学習目的と、地方在住者の地理的ハンディを補うために実施された。

## 3. 実施の背景

今回の遠隔教育の実施は、山梨県南アルプス市のブラジル人学校 A 校<sup>5)</sup>からの要請によるものである。遠隔教育という学習形態が選択された背景は、次のようなものである。

- (1) A 校の立地条件<sup>6)</sup>：県庁所在地である甲府市と中央市を挟んで西に位置する南アルプス市は公共交通機関の利便性が低く、地域住民の主たる移動手段は車・バイク・バスの順である<sup>7)</sup>。また、ブラジル人学校の近辺に日本語教室等は開設されていない。
- (2) 学習目的：日本人との接触機会の少ない生徒たちに対し、日本人との直接的な会話練習を通じて日常生活に必要なコミュニケーション能力を伸長する。
- (3) 使用ツール：フリーの IP 電話 (Skype) と Web カメラ (Logicool Qcam ® Orbit™ Mp130 万画素・マイク内臓) を使用した (コンピュータ設備は、ブラジル人学校内に既存のものを使用)。学習開始に向けて立ち上げが迅速であり、操作は簡便かつ低コストである。また、対面型の学習は会話練習に適している。

A 校に在籍する生徒は、幼児クラスから高校生クラスまで計 66 人 (2010 年 6 月現在) である<sup>8)</sup>。週 2 回 50 分の日本語授業が実施されており<sup>9)</sup>、

クラスは異なる学年の生徒が共に学ぶ複式学級である。学年ごとの日本語学習レベル、内容、教材は次の通りである。

- ・ 1～3年生：日本語の文字学習（平仮名・カタカナ）
- ・ 4～5年生：『こどものにほんご1』『こどものにほんご2』（スリーエーネットワーク）
- ・ 6～8年生：『みんなの日本語初級1 書いて覚える文型練習帳』『みんなの日本語初級2 書いて覚える文型練習帳』（スリーエーネットワーク）

日本語クラス以外の科目はすべてブラジル本国の教科書を使用し、教員はポルトガル語母語話者である。授業は午前中のみで、ボランティアによる送迎車が出発する19時半、或いは各自の保護者が迎えに来るまでの時間生徒たちは同校に留まっている。

今回遠隔教育を実施したのは、8年生の3名で日本語能力はほぼ同程度である。授業では、現在『みんなの日本語 初級1』の復習を行っており、終了後は『みんなの日本語 初級2』の学習に移る予定である。家庭内における日本語環境は、表1の通りである。

3人の日本における滞在期間は6年～11年と

表1 学習者の家庭内における日本語環境

R (13歳・男)	5歳で来日。祖父母は日本語で話すことができるが、Rはポルトガル語で応答している。母親は初級終了程度の日本語能力を有するが、家庭内ではポルトガル語で会話をしている。
K (14歳・女)	8歳で来日。両親はほとんど日本語が話せない。家庭内ではポルトガル語で会話をしている。
T (14歳・女)	3歳で来日。母親はほとんど日本語が話せない。父親は事務職についており、独学で日常会話程度の会話能力と、辞書を用いた読み書きができる。家庭内ではポルトガル語で会話をしている。

長期に渡るが、日本語のレベルは初級前半終了程度である。8歳で来日したKの発話能力は3人の中で最も低く、逆にRは発話が活発で発音も比較的自然である。

なお、学習者からの聞き取りによると、日用品の買い物や、外食の際の注文などは保護者が代わって行なうため、日常生活で日本語を使用する機会はほとんどない。日本人と接する機会は、日本語授業を担当する教員と、日本文化等を教えに来校する日本人ボランティアに限られている。

#### 4. 実施の概要

ブラジル人学校で行われる日本語の教室授業と連携しつつ、図1に示すように補完的に学習を分担した。

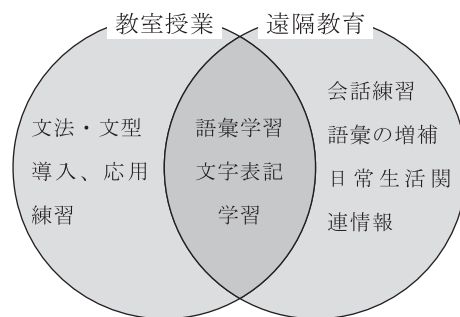


図1 教室授業と遠隔教育の補完関係

学習対象者が属する日本語クラスは、複数の学年（複式学級）による15～16名の集合学習であり、来日時期による日本語能力のばらつきがある。一方、遠隔教育は少人数・レベル別の学習である。学習内容は教室授業で学んでいる『みんなの日本語初級1』の文法・文型事項及び語彙と連動し、会話練習を中心とする。

今回指導に関わったのは、筆者及び本学日本語教員養成課程の大学生5名である。実施にあたっては、(1) 事前調査による学習者のレベル、ニーズ、学習環境等の把握、(2) 各回授業終了時のミーティング（課題と授業計画の検討）、(3) A校との意見交換<sup>10)</sup>、(4) 中間評価とフィードバックを行った（表2）。また、学生が授業を担当する際には、事前に筆者が教案指導と使用教材に関するアドバイスをを行った。

表2 遠隔日本語教育実施の流れ

2009年9月17日	遠隔教育実施に関する意向調査
2009年12月21日 22日	A校の日本語授業見学、担当教員に対する聞き取り調査
2010年2月中旬	大学とA校を繋いだテレビ電話環境のチェック
2010年2月22日	遠隔日本語教育の試行試験による学習環境のチェック 遠隔日本語教育オリエンテーション実施
2010年3月1日～7月22日	第一期遠隔日本語教育実施（全16回）
2010年4月19日	実施状況に関する聞き取り調査
2010年6月3日	実施状況に関する聞き取り調査・交流会の実施

5. 実施状況

5-1 学習目標の設定

実施にあたっては、表3のような学習目標を設定した。実施過程において明らかになった課題は、学習目標に随時反映した。

日常生活に必要なコミュニケーション能力を伸長するという目的のため、日常生活に必要な語彙力の補強を、会話練習と並行して行った。

遠隔教育の開始後明らかになったのだが、日常的に日本語に接する機会の少ない学習者は日本語の文字に対する新密度が低く、「読む」「書く」能力と、「聞く」「話す」能力のバランスが悪い。この点を改善するため、コミュニケーションに焦点を置きつつ、関連する表記の学習にも十分な時間を取ることにした。したがって、表中のB)「読む・書く」の学習内容は、A)「聞く・話す」の学習

表3 遠隔日本語教育の学習目標

A) 聞く・話す	
1. 文レベルの応答ができる	
2. 自分のことについて話すことができる	関連語彙の補強
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の名前・住所・年齢・誕生日等</li> <li>・好み・趣味・特技（「～が／～することが好きです」、「～が／～することができます」）</li> <li>・希望・願望（「～がほしいです」、「～が（を）～たいです」）</li> <li>・一日の生活（動詞、「（時間）に／～から～まで～」、「（場所）で～」、「～て、～ます」）</li> <li>・過去の経験（過去形、「～月～日」、「（交通手段）で～」、「（人）と～」、「（場所）へ～」）</li> </ul>	
3. 人・物・場所の様子を説明することができる	関連語彙の補強
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「～があります／います」、数量詞</li> <li>・「～は、形容詞・形容動詞です」、「～くて～です」、「～で～です」、「どんな～ですか」</li> <li>・比較（「～より～のほうが～です」、「どちらのほうが～ですか」、「～が一番～です」）</li> </ul>	
4. 道案内ができる	関連語彙の補強
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「～と～があります」、「～てください」</li> <li>・「～を右／左に曲がってください」、「～つ目、二つ目・・・」</li> <li>・位置詞（「～の 右、左、隣、前、後、等」）</li> </ul>	
B) 読む・書く	
1. 既習の語彙について、ひらがな・片仮名の選択が正しくできる	
2. いくつかの簡単な漢字の読み書きができる	
3. 日常生活に必要な読み書きができる	関連語彙の補強
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の住所・名前</li> <li>・身近な物品の名称、場所・建物の名称、等</li> <li>・既習の文型を使って短い文章を書く</li> </ul>	
C) 情報	
日常生活に関わる知識を身につける	関連語彙の補強
<ul style="list-style-type: none"> <li>・表示・標識の意味（立入禁止、非常口など）（「～ないでください」「～てはいけません」）</li> <li>・公共の建物・緊急の際の電話番号（110、119など）、等</li> </ul>	



内容にほぼ連動している。

なお、日本社会との接触が少ない学習者に、日常生活において必要な情報を提供するため、会話練習の中に関連する内容を組み込んだ(表中C)。



## 5-2 指導方法

遠隔日本語教育は、毎週1回約1時間(13:30~14:30)を基本に実施された(資料参照)。遠隔教育の指導は、図2のA~Eを組み合わせた次の5つのパターンによって実施された。

- (1) 教授者の質問に学習者が応答する(A→B)
- (2) 学習者が質問し教授者が応答する(B→A)
- (3) 学習者同士が質問し合う(C)
- (4) 教授者と学習者が一体となってタスクを実施する(D)
- (5) 複数名の教授者がデモンストレーションを行った後、学習者側がタスク活動を行う(E→C、E→D)

結果的に学習が比較的スムーズだったのは、教授者が参加する(1)、(4)、(5)のE→Dのパターンである(写真)。遠隔教育という学習環境では教授者の介在が間接的になるため、練習の維持・管理が重要である。

・(1)のパターン例

・(5)のパターン例

そのため、指導にあたっては学習者に課題を提示し、回答を得た後は教授者側からできるだけ速やかに評価を行うよう心がけた。このような短いスパンで行われる<課題提示→評価(含む確認・修正)>のやりとりを、図3に示すような<視覚認識→音声化→文字化→文字の音声化>という一連の構造的な過程の中で繰り返した。同様の学習形態は、文法・句型を用いた会話練習においても用いられた。

教授者と学習者との頻繁なやりとりは、Webカメラという物理的な条件から来る観察不能な時間帯を最少化し、学習者の集中力を高める役割がある。同時に、遠隔教育には不可避な物理的・心理的な距離間を縮めるためにも有効である。なお、遠隔日本語教育の指導にあたった学生には、学習者との関係性を構築・維持するために、(1)ポジティブな反応(褒める、励ます)を頻繁に行う、

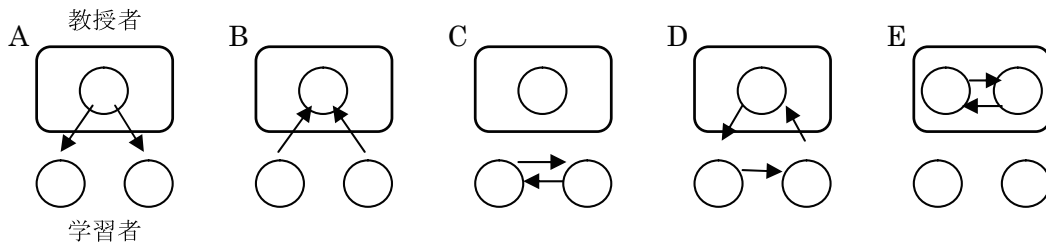


図2 指導形態のパターン (\*簡略化するため図中学習者は2名)

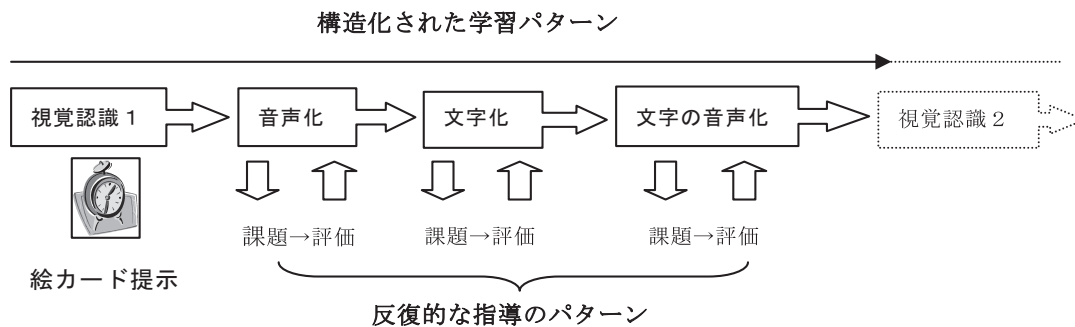


図3 遠隔教育における「語彙学習」

(2)経過確認を頻繁に行う(「書けましたか?」「見せてください」等)、(3)機会を見て学習者の状態ことを尋ねる(「疲れましたか?」「楽しいですか?」等)、などのストラテジーが観察された。

### 5-3 教材・教具等

Webカメラの限られた視野に対して、文字の小さな教科書を部分的に提示しながら学習を進めることは不適當である。そのため、子ども用の絵カード<sup>11)</sup>や文字カードを活用し、小さなサイズのホワイトボードを用いて文型や語彙を提示することとした。提示する教材は、一定の距離内でカメラの視野に入る大きさに統一している。

また、学習者には各回の学習内容を記録するためのカードとファイルを準備し、学習内容をその日の成果物として保存できるようにした。授業内容によっては、補助教材や書き込み用のプリントを事前に添付ファイル或いは紙コピーでA校側に送付した。

なお、提示する文字情報に関しては、ペンの太さや文字の大きさに対する配慮が必要であるが、この点に関しては同様な配慮を学習者側にも要請した。

## 6. 実施結果

### 6-1 学習者の課題と成果

語彙学習は、主に絵カードと連想法によって

表4 既知・未知の語彙例

領域		語彙例
飲食物等	既	ピーマン、トマト、なす、きゅうり、人参、レタス、カレーライス、おにぎり、たこやき、ピザ、ポテト、牛乳、ジュース、ビール、水、ドーナッツ、チョコレート、ケーキ、アイスクリーム、すし、桃、ぶどう、りんご、メロン、レモン、オレンジ、さくらんぼ、パイナップル、パパイア、ブルーベリー、アセロラ、栗、柿、いちご、すいか、バナナ、グレープ
	未	レンコン、かぼちゃ、さつまいも、みかん、じゃがいも、煎餅、団子、ホットケーキ、梨、砂糖、トウガラシ、こんにゃく
動・植物等	既	ねずみ、かめ、猫、犬、象、きりん、うさぎ、猿、シマウマ、ゴリラ、オカピ、虫、蟻、ライオン
	未	すずめ、めだか、ろば、やぎ、らくだ、ラッコ、ひまわり、松、梅
文具等	既	ホチキス、ペン、筆箱、紙、ホワイトボード、はさみ、鉛筆、ロッカー、消しゴム、ファイル、ノート、パソコン、ピアノ、太鼓
	未	黒板、下敷き、虫めがね、セロハンテープ、とびばこ、図工、理科
日用品等	既	テレビ、机、椅子、新聞、箸、皿、コップ、かぎ、眼鏡、シャンプー、まくら、電池、電気、ドア、窓、本、冷蔵庫、マッチ、マスク、眼鏡、ごみ、ラジオ、カメラ、エアコン、財布、手紙、トイレトペーパー、ハンカチ、お金、時計、薬、電話
	未	掃除機、洗濯機、アイロン、ほうき、ぞうきん、ちりとり、扇風機、電子レンジ、炊飯器、包丁、まな板、やかん、鍋、フライパン、鏡、電卓、ろうそく、如雨露、水筒、輪ゴム、針、糸、ぬいぐるみ、団扇、座布団、絆創膏、お風呂、包帯、車椅子、切手、はがき
建物・場所等	既	家、病院、郵便局、工場、公園、スーパー、デパート、レストラン、学校、大学、銀行、駅、ラーメン屋、図書館、プール、海、ディズニーランド、映画館
	未	教会、交番、動物園、ポスト、消防署、喫茶店、薬局
乗り物等	既	飛行機、車、電車、船、新幹線、自転車、タクシー、バス
	未	救急車、消防車、ボート、ヘリコプター、パトカー、三輪車、オートバイ
人・物の様子	既	背が高い、背が低い、大きい、小さい、重い、赤い、白い、黒い、青い、茶色い、桃色、ピンク、黄色い、強い、速い、遅い、長い、短い、まずい、おいしい、四角い、丸い、痛い、親切、臭い、あたたかい、冷たい
	未	狭い、広い、かたい、やわらかい、弱い、軽い、太い、細い、水色、紫、みどり

行った。連想法には、「しりとり」やキーワードから自由に語彙を発話するというようなゲームを活用した。

語彙の検索速度は学習者によって若干異なるが<sup>12)</sup>、全体の傾向としては日用品の語彙がやや不足しており、種類に偏りが見られた(表4)。

音声化した語は逐次カードに書き込ませているが、長音を中心に表記の不正確なケースが見られる。

例: こり (こおり)、ピーザー (ピザ)、れいぞく (れいぞうこ)、スーブン、カメラー、きろい (黄色い)、トイレーパー、トムト (トマト)、アエロン (アイロン)、さんかち (ハンカチ)、など

特徴的なのは、語彙が既知のものであっても、文字化の過程において学習者はしばしば片仮名表記を選択すべきかどうかわからなかった点である。語彙知識と文字表記の間に見られるギャップは、前述したように日常接する日本語の文字言語の量が少ないこと、普段日本語の文字表記を行う必要性が低いこととも関係しているのだろう。

例: 「ばんを たべます」、「ばれーぼるが すきです」、「ばそこんは、カタカナ?」、「でんち、カタカナで書く?」

次に、学習者の発話は、当初ほとんどが単語単位であり、聞き手が必要な部分を補完する必要があった<sup>13)</sup>。文単位の発話に見られる典型的な特徴は、助詞の省略と接続形の「と」による代用である。文字化作業において、次のような課題が明らかになった。

例: 「すし いちばん好き」→文字化: 「おすしで好きです」(助詞の誤り)、「絵 かく できません」→文字化: 「えいごうた ことができません」(文型・活用の誤り)、「へや、猫」→文字化: 「猫があります」(動詞選択の誤り)、「しろい、つめたい」→文字化: 「白いと つめたい」(接続形の誤り)

学習の成果としては(1)日常生活に必要な語彙が増えたこと、(2)既習の語彙表記が正確に行われるようになったこと(特に、片仮名表記の選択)、(3)教室授業で学んだ文法・文型事項の

確認と正確な運用のための修正が行われたことが挙げられる。また、今回、学外の日本人と直接会話をする機会が得られたことは、学習者の発話意欲を高める効果を生んだようである。実際に、当初消極的でほとんど発話が見られなかったKは、遠隔教育の後半、もっとも積極的に応答するようになって<sup>14)</sup>。

## 6-2 学習ツールの課題

今回使用したテレビ電話システムは、簡便ではあるが学習ツールとしてはいくつかの課題がある。まず、インターネット回線の容量や機器(PC、カメラ、マイク、スピーカー等)の機能によって、(1)音声上の問題(不明瞭、音声の中断)、(2)画像の問題(不鮮明、画像の中断)、(3)接続の中断、等の生じる場合がある。また、実物教材の使用に際しては、質感や重量感が伝わりにくい点にも注意が必要である。

そのほかツールの活用方法としては、多くの学習者が一度に同一場所で学習を行うケースも想定される。画像はディスプレイやプロジェクターによって、また、音声はスピーカーによって拡張・増幅が可能である。また、学習者・教授者側の音声を明瞭に伝えるために、可動式マイクも有効である。

## 7. まとめと今後の課題

ブラジル人学校で学ぶ児童生徒の日本語教育をより充実したものにするため、大学とブラジル人学校を繋いだeラーニングとして遠隔日本語教育を実施した。

ブラジル人学校側のニーズは、日本語学習の時間増、既習事項を用いた会話練習、学外の日本人とのコミュニケーション機会の拡張である。実施にあたっては、ブラジル人学校内の教室学習と補完的な関係を有した、いわゆる「ブレンディッド・ラーニング」の形態を取るよう、全体の学習計画を立てた。約半年間(16回)に渡る実施の結果、日本語の語彙力・会話能力において一定の伸長が見られた。

当該ブラジル人学校は郊外に立地し、公共交通

手段の確保が難しいという地域性が存在する。こうした環境的な条件は、遠隔日本語教育という手段を用いることで緩和することができる。また、今回使用したテレビ電話システム (Skype) は、学習機器として十全な学習環境を提供できるとまでは言えないが、学習開始までの立ち上げが速く、低コストでかつ操作が簡便である。したがって、地域において十分普及可能な教育方法であると考ええる。

今後は、今回実施した教育の手法が、ブラジル人学校のみならず、多様な環境における日本語学習と「ブレンド」可能な教育手段となるよう、さらに学習内容の整理を行い、それを基にした教材開発を行う予定である。

## 注

- 1) 平成 20 年 1 月と平成 21 年 2 月の調査を比較すると、ブラジル人学校数は 90 校から 86 校に、また在籍生徒数は 6,373 人から 3,881 人へ大幅に減少している (文部科学省 2009)。なお、2010 年 8 月 15 日付の朝日新聞電子版によると、日本の公立学校に通う外国籍の子どもの割合が、増加の傾向にあるとのことである。
- 2) 文部科学省 (平成 22 年 5 月) 「「定住外国人の子どもの教育等に関する政策懇談会」の意見を踏まえた文部科学省の政策のポイント」の第 5 項には「外国人学校における教育体制の整備」として、日本社会で生活していく上で必要不可欠な日本語習得のための学習機会の充実が挙げられている。
- 3) 濱田 (2008) によると、日本での平均滞在期間は、2001 年調査時には約 6 年であったのが 2006 年には約 9 年に達している。また、「ポルトガル語しか話せない」と回答した生徒は 2001 年には 35.3% であったが、2006 年には 50.3% に増加している。
- 4) 濱田 (前掲) によると、「日本語をしっかりと教えてほしい」という項目に対し、「とてもそう思う」という答えた保護者の割合は、62.7% (2001 年) から 69.8% (2006 年) と増加している。また、「日本社会に触れるような機会を作って欲しい」という項目に対しては、「とてもそう思う」が 42.2% (2001 年) から 51.3% (2006 年) に増加している。
- 5) A 校は昨年までブラジルに拠点のある私立学校の系列校であったが、県不況の影響で帰国するブラジル人家族が増加し児童生徒が減少 (2005 年の 148 名から 2010 年 1 月には 48 名まで減少) したため、系列から外れた。その後、保護者からの要請を受けて運営を継続し、現在各種学校の認可を申請中である。

- 6) A 校は南アルプス市の南東部に位置し、県内で外国人登録者の人口比率が最も高い中央市 (外国人登録者数 2268 人、人口比 7.1%) の市境に近い。中央市は県内でブラジル人が最も多く在住する地域であり、在住外国人の約 70% がブラジル国籍である。一方、南アルプス市は山梨県の西部に位置し、外国人登録者数は 1259 人 (総人口比 1.7%)、外国人住民の約 37% がブラジル出身者である。山梨県全体では、外国人登録者数は 17,156 人 (総人口比約 2%)、国籍別人口は 1 位ブラジル (約 30%)、2 位中国 (約 21%)、3 位韓国・朝鮮 (約 15%) である (山梨統計データバンク平成 19 年末現在)。
- 7) 「南アルプス市公共交通のあり方に関する基礎調査結果」2010 年 2 月 16 日更新分  
<http://www.city.minami-alps.yamanashi.jp/kurashi/kurasu/douro-koutsu/files/koukyoukoutuu-kisochousa-h19>
- 8) A 校の学級編成は、幼児クラスと、1 年～8 年生の義務教育クラス及び高校生クラス 1 年～3 年生である。なお、ブラジルの教育制度の改編に伴って、新規入学者からは 8 年制から 9 年制に移行している。
- 9) 現在 (2010 年 6 月) では、2 年生以降の日本語科目が増設されている。
- 10) A 校側からは、次のような意見があった。
  - 語彙が足りないの、わからないことを質問したくてもなかなかできないようだ。
  - 日本語能力を身につけることは、子どもたちの将来 (就職) にとってプラスになると思われる。現時点では、日本語能力試験の 3 級或いは 4 級の受験を目標にしている。
  - 現在日本語を学習している 3 人の子どもは、将来ブラジルへ帰国して進学する予定である。
  - ブラジル人学校卒業後の子どもたちの主な進路は、ブラジルへの帰国、或いは日本国内での就労である。だが、今後は日本の高等教育機関への進学も選択肢に加えることができればと思っている。
 なお、上記と関連して 6 月には大学に学習者を招いて本学学生との交流会を行った。この際、見学に訪れた子どもたちは日本の大学に強い興味を示していた。
- 11) 主に「ことば遊び絵カード」No.1～No.10 (すずき出版) を使用した。
- 12) 3 人の中では R が最も語彙が豊富であり、回答すべき語が浮かばなかった際には、既有知識を活用して課題を解決しようとする。その際、以下のようなストラテジーが観察された。
  - ① 外来語で代用 (「鏡」→「ミラー」)、② 類推 (「じょうろ」→「花水 (花に水をやるから)」)、③ 似た音で代用 (「弟」→「おととい」)、④ 否定形を使用 (「軽い」→「重いじゃない」)、⑤ 造語 (「炊飯器」→「ごはん器、ごはんづくり」)
- 13) 学習者に取材したある新聞社の記者によると、当初子



どもたちの応答がきわめて断片的だったため、インタビューの開始当初は、子どもたちは日本語がほとんどわからないと判断したとのことである。

- 14) Rの保護者によると、遠隔教育を開始してからは外食などで外出した際に、自分から注文等の発話を行うようになったとのことである。

(2010年6月23日)

- (12) Bersin, J. (2004) *The Blended Learning Book: Best Practice, Proven Methodologies, and Lessons Learned*. New Jersey, John Wiley & Sons, Inc. (赤堀 侃司 監訳 (2006) 『ブレンディッドラーニングの戦略』 東京電機大学出版局)
- (13) Garrison, D.R. & Vaughan, H.D. (2008) *Blended Learning in Higher Education: Framework, Principles, and Guidelines*. San Francisco, Jossey-Bass.

## 参考文献

- (1) 池田伸子 (2010) 「ブレンディッドラーニング環境におけるeラーニングシステム利用の効果に関する研究:立教大学初級日本語コースを事例として」『ことば・文化・コミュニケーション:異文化コミュニケーション学部紀要』2、pp.1-12.
- (2) 今津孝次郎、児島明 (2001) 「ブラジル人学校と日本の学校 東海地域の newcomer 個人学校調査より」日本教育学会発表要旨集録(53)、pp.356-359.
- (3) 小内透編著 (2003) 『在日ブラジル人の教育と保育 群馬県太田・大泉地区を事例として』 明石書店
- (4) 小野寺理佳 (2002) 「外国人移住地域の教育と国際交流活動:第2部ブラジル人学校における教育と父母の意識:第5章誰のためのブラジル人学校の選択か:子どもに託された親の夢」『調査と社会理論』 研究報告書19、北海道大学 HUSCAP
- (5) 濱田国佑 (2008) 「ブラジル人学校の児童・生徒と保護者の意識」『調査と社会理論』 研究報告書25、北海道大学 HUSCAP
- (6) 篠崎大司 (2010) 「Moodle を活用した上級日本語聴解 eラーニングコンテンツの開発と学習者評価 -ブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて-」『別府大学紀要』 No.51、pp21-34.
- (7) 中溝朋子 (2009) 「留学生のための日本語初級 e-learning 教材の開発と課題」『大学教育』6、pp119-126.
- (8) 文部科学省 (2009) 「ブラジル人学校等の実態調査研究結果について」ブラジル人学校等の教育に関するワーキンググループ 第三回配布資料(平成21年4月9日)  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/kokusai/005/index.htm#pagelink3](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/005/index.htm#pagelink3)
- (9) 文部科学省 (2010) 「「定住外国人の子どもの教育等に関する政策懇談会」の意見を踏まえた文部科学省の政策のポイント」(平成22年5月19日付け)  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/kokusai/008/toushin/1294066.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/008/toushin/1294066.htm)
- (10) 宮内功編著 (2009) 『eラーニングからブレンディッドラーニングへ』 共立出版
- (11) 山梨県統計データバンク  
[http://www.pref.yamanashi.jp/toukei\\_2/DB/dbindex.html](http://www.pref.yamanashi.jp/toukei_2/DB/dbindex.html)

## 資料

表 遠隔日本語教育実施内容

回	月 日	学 習 項 目
1	3月1日	自己紹介・住所と名前を書く、「私は～が好きです」(第9課)
2	3月8日	住所と名前の復習、数字10～1000、「買い物」どこで／なにを／だれと、いくら(～円です)、食物・飲物の名前を言う、注文する
3	3月15日	住所(郵便番号)と名前の復習、行きたいところについて話す(「私は～たいです」(第13課)、誰と、どんなところへ、等)
4	3月29日	住所と名前の復習、生年月日、絵カードで語彙導入(生活・食物関連)、「～に～があります」(第10課)
5	4月5日	自己紹介まとめ(住所、名前、生年月日、好きなもの等)、語彙復習、語彙導入(形容詞関連)、人の様子を説明する(「～はどんな人ですか?」(第8課))、日付「何の日ですか?」
6	4月26日	自己紹介(発表)、語彙導入(日用品、文具関連)、一日の生活について話す(「私は、～時に～をします／しました」(第4課～6課))
7	5月13日	自己紹介(発表)、「～時に～をします」(第4課～6課)、語彙復習、語彙導入(病院、文具関連)、語彙ゲーム、漢字(曜日、親族名称関連)
8	5月20日	好きな食物、漢字の復習、語彙導入(建物・場所関連)、「～で何をしますか?」(第6課)、長音聞き取り、語彙ゲーム、表示・標識の意味(「～てはいけません」(第15課))
9	5月27日	語彙復習、「私は～へ行きます」(第5課)、長音聞き取り練習、語彙導入(形容詞・色関連)、物の様子を説明する(「～くて～です」(第16課))
*	6月3日	交流会(ブラジル人学校8年生及び高校生と大学見学・交流会を実施)
10	6月10日	語彙復習(建物)、語彙導入(建物・場所関連)、「～で～をします」(第6課)、形容詞の復習、語彙導入(形容詞・形容動詞関連)
11	6月17日	形容詞の復習(対義語)、「どんな人が好きですか」(第8課、9課)、「～くて～です／～で～です」(第16課)、ここまで学習した語彙の総復習
12	6月24日	数え方(ひとつ、ふたつ、助数詞)、場所の様子を説明する(「～がいくつありますか?」(第11課))、語彙ゲーム、「～より～の方が～です」「～が一番～です」(第12課)
13	7月1日	比較級・最上級の復習、語彙導入(乗り物)、「～とき、どうしますか?」(第23課)、緊急電話番号、語彙導入(病気関連)
14	7月8日	語彙復習(乗り物)、緊急の際の電話番号、語彙導入(乗り物関連)、語彙導入(動詞・辞書形)、「～ことができます」(第18課)、助詞の練習(「は」「が」「に」「で」)、語彙ゲーム
15	7月15日	語彙復習(動詞辞書形)、「～ができます、～ことができます」(第18課)、語彙復習(建物)、道案内(「～と～があります」、位置詞)(第23課)
16	7月22日	物当てゲーム(「～くて～です」(第16課))、道案内復習、間違い探しゲーム、語彙導入(夏休み関連)、夏休みの計画(「～がしたいです／ほしいです」(第13課))

\*表中( )内の課は『みんなの日本語初級1』に対応